

幼稚園・保育園における年長時期の永久歯萌出状況

○楠田理奈, 柏木伸一郎, 岩男好恵, 久保田祥子, 山本雅子

(小児歯科柏木医院)

【目的】

第30回九州地方会大会において、卒園時期における永久歯萌出状況について報告した。今回は、年長時期における永久歯萌出状況について調査したので報告する。

【対象と方法】

調査は福岡市内の保育園2施設、幼稚園2施設で行った。対象者は2012年度年長児194名、2013年度年長児141名とした。2013年2月(以下卒園児健診)と2013年5月(以下春の健診)に健診を行い、その結果から性別、永久歯萌出状況について検討した。また、永久歯の萌出を認めた者については、歯種などについても調べた。

【結果】

1 春の健診結果

永久歯の萌出を認めた者は36名(25.5%)で、性差はみられなかった。歯種別の萌出状況は左側下顎中切歯の割合が17.7%で最も高く、次いで右側下顎中切歯が14.9%であった。

2 卒園児健診結果

永久歯の萌出を認めた者は143名(73.7%)であった。性差を比較すると女兒の方が約2割高かった。歯種別にみると、最も割合が高かったのは左側下顎中切歯の72.2%、次いで右側下顎中切歯が71.1%であった。

【考察】

前回の調査で得た結果と同様に、約7割の園児が卒園前に永久歯の萌出を認めた。さらに今回の調査により約2割の園児が年長初期、既に萌出している事が分かった。これにより従来年長児対象に行ってきた永久歯に関する歯科保健指導の時期を、年中時期に早める必要があると改めて示唆された。

これらの結果が今後の歯科保健指導において有用な資料となるよう、更なる調査を進めていきたい。

【参考文献】

長坂信夫 他:「幼若永久歯の総合的研究」
38(1):1-13, 2000

小児歯科医院で行った発達障害児の療育

—第1報 予後調査の概要—

○緒方克也*, 石倉行男*, 西崎智子**,

(*医療法人発達歯科会おがた小児歯科医院

**同発達保育科)

【目的】

当小児歯科医院では来院した患者に発達に問題を持った患者を見つけ、それらの患者を対象として言語聴覚士、保育士、臨床心理士らによる療育を1990年来実施してきた。その結果、患者がどのような発達の経緯をたどったかを知り、今後の療育の参考にする目的でその後の追跡調査を行ったので報告する。

【対象と方法】

対象は過去に当小児歯科医院の発達障害児を対象とした発達保育科の療育を受けた小児の保護者85名で、質問用紙を郵送し任意の無記名回答を回収する方法で行った。

【結果】

調査の回収率は56%であった。対象者の幼児期の平均IQは78.3で境界域であった。対象者は自閉症スペクトラム、LD、ADHD、軽度の精神発達遅滞児であった。これらの対象児の小学校での在籍学級は公立の通常学級が70%で次いで支援学級26%であったが、中学校では通常学級は51%、支援学級41%で他に特別支援学校も見られた。高等学校では公立通常が18%、私立学校35%、支援学校23%、特別支援高校18%であった。高校卒業後は大学進学36%、専門学校16%で就労が48%であった。そして現在の生活に満足と回答したのは33%で満足していないが12%、どちらでもないが37%であった。

【考察および結論】

小学校時代に比較して中学校では支援学級が増加していたのは、発達上の特有の問題が表在化したためと思われた。このことは高校でも同様で、特別支援教育の高等学校を利用した者が増加し、その背景に成長後にもコミュニケーション障害や理解の認知の問題が存在していることが理由と思われた。

小児歯科医院では発達障害児との出会いも多く、発達障害やその患者の特性を理解した上で、患者の社会性の発達に意味のある経験を提供できる対応が必要と思われた。